東京都指定有形文化財（建造物）

旧本田家住宅だより

Vol.10　2023.10

◎本田家と篆刻

篆刻は書家の余技から始まった技で、石や木などに自分の号名等を刻み、書に押印をして品格や風雅の風情を高める役割を果たします。

本田家の篆刻作品で確認できる最古は、江戸時代寛政７年（1795）生まれの本田孫三郎定价（号・昂斎）の篆刻印です（図２）。以降、代々受け継がれて来ました。特に、14代本田定壽（号・石庵）はその技に磨きをかけ、篆刻界の雄である初世中村蘭台、石井雙石と親交を深くして、秀でた作品を多く残しています。著名な漢詩文をいくつかに分けて作られた成語印のうち、写真の「酔翁亭記」は展覧会での入選など評価も受けています（図３）。印材となる石も漢詩に合わせて選び、文字も異なり、計算し尽くされた典雅な篆刻作品は、文人としての蓄積のなせる技によるものと言えます。

図１　書斎北側

図２

本田家最古の印の一つ
本田家の所在を表す
（家在玉川之北）

図３　石庵「酔翁亭記」印

また、15代本田定弘（号・谷庵）は父に影響を受け、二世中村蘭台、石井雙石に師事して磨きをかけ、その人柄を表すかのような実直な作風を展開します（図４）。篆刻は石に留まらず、刻木大作にも取り組み、谷保天満宮、大國魂神社、府中高安寺などに奉納されています。交友は広く、篆刻印は、国立では山口瞳、関頑亭、文学界では吉行淳之介、将棋界では米長邦雄、中原誠、写真界では田沼武能、また、大橋巨泉などにも渡っています。市内の表札に谷庵の刻木作品を見ることがあります。散歩の楽しみに谷庵作品を探してみては如何でしょうか。

図４　谷庵「干支」印

◎書斎と篆刻作品

昭和34（1959）年に内築された旧本田家住宅の書斎には、おびただしい数の篆刻作品が、またその印や刻木を制作する過程で生まれた原稿や参考資料、仕上がった印を押して冊子にしたものや刻木がところせましと仕舞われていました。調査の初期、平成22（2010）年の書斎は、谷庵が亡くなってから20年に近い歳月が経っていましたが、堆積した埃を除けば、今も谷庵がおられるかの雰囲気を保っ

図６　書斎前室と谷庵の刻木衝立

図５　谷庵の篆刻印

ていました。近隣で昔から暮らす方ですら、敷居が高く、お宅には上がったことがないと聞き及ぶその場所は、江戸時代からの文人の系譜が現代の世にまで受け継がれる歴史を肌で感じる特別な空間でした。

土間から沓脱石（くつぬぎいし）で履物を脱ぎ、上（あ）がり框（かまち）に立つと、大きな衝立（ついたて）に出迎えられます。天満宮で落雷にあった欅に刻木された谷庵の大作です（図６）。書斎前室の畳敷きの小間に入り見上げると、本田定年（号・退庵）氏が日本画に書を添えた扁額が飾られていました。また、前室手前には、篆刻界で著名な二世中村蘭台の刻木衝立もあります（図７）。

図７　二世中村蘭台の衝立

奥の部屋に入ると、正面右に床の間、北側奥に壁面全面に書棚があり、書道、篆刻関係本、自作印を押印した和綴本がきっちりと隙間なく収められています。その手前に、石庵の写真や谷庵の篆刻作品が飾られています。また、南の庭に面した広縁に置かれた机は、明かりを取り込み篆刻制作に打ち込めるよう配置され、手近に辞書や交友名刺が置かれ作品制作が日常であったことがわかります。作業の合間に丹精込めた花々を愛でながら過ごす、昭和の文人の書斎です。

（本田家調査員　濱中秀子）

図８　書斎南の文机に座る谷庵

図９　書斎南　窓に面した文机

発行：国立市教育委員会　生涯学習課　社会教育・文化芸術係（市役所３階 45 番窓口）
☎042-576-2111（内線：323）メール：sec_shogaigakushu@city.kunitachi.lg.jp